

[翻訳]

イエルク・ヴィクラム 『少年の鑑』 (1554 年) (10)

工藤 康弘・田島 篤史・吉田 瞳訳

はじめに

本稿はイエルク・ヴィクラム (Jörg Wickram) の『少年の鑑』 (*Der jungen Knaben Spiegel*, 1554) 本文第二十三章、第二十四章、第二十五章および第二十六章の翻訳である¹。本稿の共訳者である工藤と田島は「大阪初期新高ドイツ語研究会」を発足させ、2014 年 3 月より活動を始めている。本稿はその成果の一部であり、すでに本作『少年の鑑』のタイトルページ、献辞、本文第一章から第二十二章と作品・作者の解説は発表しているため、関心を持たれた読者諸賢はそちらを参照していただければ幸いである²。なお 2018 年 3 月から吉田が本研究会に参加している

1 Wickram, Jörg: *Der jungen Knaben Spiegel*, Straßburg: Frölich, 1554.

2 工藤康弘・田島篤史訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554 年)」、『関西大学西洋史論叢』第 17 号、関西大学大学院文学研究科史学専攻西洋史専修、2014 年、20 - 32 ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554 年) (2)」、『独逸文学』第 59 号、2015 年、231 - 241 ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554 年) (3)」、『独逸文学』第 60 号、2016 年、101 - 114 ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554 年) (4)」、『独逸文学』第 61 号、2017 年、133 - 143 ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554 年) (5)」、『独逸文学』第 62 号、2018 年、33 - 44 ページ。工藤康弘・田島篤史・吉田瞳・柴亜矢子訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554 年) (6)」、『独逸文学』第 63 号、2019 年、77 - 89 ページ。工藤康弘・田島篤史・柴亜矢子訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554 年) (7)」、『独逸文学』第 64 号、2020 年、33 - 43 ページ。工藤康弘・田島篤史・吉田瞳・柴亜矢子訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554 年) (8)」、『独逸文学』第 65 号、2021 年、143 - 158 ページ。工藤康弘・田島篤史・吉田瞳訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554 年) (9)」、『独逸文学』第 66 号、2022 年、83 - 92 ページ。

ため、本誌第 63 号から共訳者として加わっていることも付言する。

翻訳にあたり底本としてハンス＝ゲルト・ロロフ (Hans-Gert Roloff) の編纂によるヴィクラム全集を用いた³。またゲルトルート・ファウト (Gertrud Fauth) およびミヒャエル・ホルツィンガー (Michael Holzinger) による二冊の校訂版も参照した⁴。前者はヴィクラム研究の第一人者による校訂版であり、前書きと後書きにヴィクラムおよびその作品の詳細な解説が付されている。後者は 1903 年のヨハンネス・ボルテ (Johannes Bolte) による一連のヴィクラム作品の校訂版を、ホルツィンガーが作品ごとに廉価なペーパーバック版で復刻したものである。このホルツィンガー版はコンパクトで参照しやすい反面、原典に収められている木版挿絵の一切が省かれているため、作品の臨場感といった点ではやや物足りなさを感じる。以上に加えてバイエルン国立図書館所蔵の初版テキストがオンライン公開されているため、そちらも適宜参照した⁵。

なお原典には章番号もコマやピリオドや段落の切れ目もない。ファウト版およびホルツィンガー版は独自に章番号を付し、文章を区切り段落分けをしている。本稿ではこれら二版の章番号に従いつつも、文章の区切りと改行は独自に行った。また本稿中に挿入している挿絵はファウト版の該当箇所をそれぞれの典拠としている。

3 Wickram, Georg: *Sämtliche Werke, Bd. 3: Knaben Spiegel; Dialog vom ungerathnen Sohn*. In: Roloff, Hans-Gert (Hrsg.), Berlin: W. de Gruyter, 1968, S. 1-121.

4 Wickram, Jörg (Verfasser), Gertrud Fauth (Hrsg.): *Der Jungen Knaben Spiegel; Mit dem Dialog: Eine Warhafftige History von einem ungerathnen Son.*, Straßburg: Karl J. Trübner, 1917; Wickram, Georg (Verfasser), Michael Holzinger (Hrsg.): *Der jungen Knaben Spiegel*, Berlin: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013.

5 <http://daten.digitale-sammlungen.de/~db/bsb00008420/images/> (2023 年 1 月 2 日最終アクセス)。

第二十三章

ヴィルバルトが父親の足元にひれ伏し、慈悲を乞うたこと。そして父親が息子の悪行を赦したこと。



「ああ、親愛なる主人にして父上、哀れで親不孝な息子をお赦してください。どうかお慈悲で私を息子としてではなく、一番下っ端のうまや番として受け入れてください。あなたの家で身を寄せる場所さえあれば、誰もやりたがらない仕事をみな引き受けます。ベッドで寝ようとは思いません。ただ屋根の下で、うまやの馬たちといっしょに住むことをお許してください。一番身分の低い下僕にも、彼が主人であるかのように従います。」

ヴィルバルトはこのように話すと、客人たちに向かって、父親の慈悲と赦しが得られるよう助けてほしいと切に願い、乞い求めました。客人たちはその後全力でこのことを実現させました。かくして老騎士はヴィルバルトを全面的に赦しました。ただし決して父親の意に背くことなく、主人としてのフリートベルトの命令にはすべて従うよう、ヴィルバ

ルトに言い含めました。このことをヴィルバルトはことのほか喜びました。なぜなら、先ほどまで誰だかまったくわからなかったフリートベルトとフェーリクスのがわかったからです。

さてすべてが一番良い方向へ転じたとき、一同はあらためていっしょに席につきました。そこでヴィルバルトは自分が出奔し、放浪したいきさつ、身に起こったことを詳しく語らねばなりませんでした。この話を皆大いに楽しみました。最後にヴィルバルトは大きく重いため息をつきながら、自分の先生であるフェーリクスをじっと見つめて言いました。「ああ、僕のもっとも誠実な相談相手であり、先生であるフェーリクス、あなたがしてくれた心からの忠告に、僕は不当なひどいあだで報いてしまった。どうして僕は楽し気な目でいつもあなたを見ていられようか。

僕としたことが、ロタールの破廉恥な一味なんかに入ったなんて。というのも、ロタールは手を替え品を替え、陰険で悪辣な扇動によって僕にあらゆる不埒な行為をさせたからだ。彼にそそのかされて僕は墮落し、あざけられ、愛する母上を奪われた。愛する主人である父上を与えてくれた親としての、心からの良い助言に従おうとしなかった僕は、しまいには不潔きわまりない中、貧しく無骨な豚飼いに付き従い、冷たい風、雨、雪にさらされながら時を過ごさなければならなかった。

父上の屋敷にいたときは、上品で、豊かで高価な食事にも満足しようとしなかった。しかし豚飼いの仕事をしているときは、ラードで炒めていない野草やかぶで満足しなければならなかった。ピロードや絹は衣服としては価値がないと思っていたけれど、しまいには寒さから身を守り、当座をしのごために、肩に広げた、最低限必要なドリル織りの袋でもよしとした。だから当然のことながら少年たちはみな、貴族もそうでない人も、僕を反面教師とし、あのような悪い仲間から距離をとり、このような親不孝をしないだろう。

ああ、親愛なる兄弟フリートベルト、経験してみて今ようやくわかった。若いときあなたから言われた、兄弟としてのやさしい忠告はみな正しかった。でもあときは従わなかった。それゆえ今は僕が下僕で、あなたが主人だ。それが正しいというものだ。僕をウラディスラヴィアのあなたのもとへ導いて、再びそのような剣を持つ身分に戻る手助けをしてくださった神さまに感謝したい。おかげで主人である父上は僕にお慈

悲をかけてくださり、りっぱになって威厳のあるあなたに僕は出会えた。このことで僕は苦しみから少なからず解放された。」そうした言葉でヴィルバルトは一同の涙を誘いました。彼らはできる限りヴィルバルトを慰めました。

さて食事が終わり、食卓が片付けられ、皆がいとまを告げ、家路につくと、ヴィルバルトはすなおで従順な下僕のように、フリートベルトと父親のあとをついていきました。二人に対してヴィルバルトは従順で腰が低く、騎士である父親を怒らせるのではないかと、ずっと心配していました。まもなくフリートベルトがヴィルバルトのためにきれいな服を作らせました。こうして放蕩息子は仕事熱心な下僕となりました。彼の振る舞いはみんなに好かれました。以前は恥ずべき悪い仲間のせいであつた失っていたヴィルバルトの理性と知性が増えていきました。

このように、貴族としての心根の多くが、本来生まれつき備わっていたにもかかわらず、ろくでもない悪い仲間によって墮落し、財産と名誉を失います。そしてそれらが再び認識されるのはごくわずかです。というのも、私の知る限り、悪い仲間によって財産を使い果たし、その結果誠実さとしつけと規律をみな手放し、悪徳と悪習を身につけた人がたくさんいるからです。しまいには、そういう人たちは刑場で、彼らの「もりやく傳役」を捜さなければなりません。その「傳役」自身がみじめに懲らしめを受けていたのですが。この話はこのくらいにして、かつて罪を犯した善良な人たちが、ヴィルバルトを模範として徳を取り戻すために、ヴィルバルトが残りの人生をどのようにまっとうしたかをさらに語りましょう。

第二十四章

ヴィルバルトが騎士団長の森林長官となったこと。彼が狩りの際にたいそう優雅に狩人らしくふるまったこと。

はじめに読者の皆さんには、ヴィルバルトがどのように生きてきたか、その人生の始まりから半ばまでを聞いてもらいました。今度は彼の終わりも見てみましょう。ヴィルバルトは父とフリートベルトのもと大いなる喜びのうちに暮らしましたが、彼はすべてにおいて上手く立ち回

りました。ヴィルバルトに関するこの噂は、まだ彼が戻ってきたことを知らない宮廷にも広まりました。騎士団長は御前に老騎士を呼びだし、その息子に関するあらゆることを尋ねました。それに対して老騎士はたいそう詳しく報告しました。そこで騎士団長は、息子を宮廷に送るよう老騎士に命じました。ヴィルバルトを家臣に取り立てるつもりだったのです。善良な老騎士はこれに満足し、ヴィルバルトを宮廷へと送りだしました。



騎士団長はヴィルバルトを見ると、たいそう親し気に笑いました。そしてヴィルバルトに、ボースナを飛びだしたあと、どんな境遇にあったかを詳しく尋ねました。ヴィルバルトは騎士団長にすべてを詳しく伝えました。「ふむ」騎士団長が言いました。「悪しき放蕩息子は皆こうなるべきである。さもなければ彼らのほとんどが父母から逃げだし、まったく不従順となるであろう。さてヴィルバルトよ！お前はいまや貧困と労苦がどのようなものか知っているのです、そうであるなら、お前を家臣として取りたてたい。もしお前の働きぶりがよければ、日ごとより良い仕事を与えるつもりだ。これについてお前の父親とはすでに話し合ったので、彼もたいへん乗り気だった。知っておいてほしいのだが、最近、森林長官が亡くなった。もしこの職を気に入り、狩りをする気があるのなら、森林長官の職を与えよう。」

主人が自分に対して慈悲深く好意的であることを知ったいま、ヴィルバルトほど喜んだ人がいたでしょうか。彼はたいへん感謝してこの職に就き、森や林のなかで大いに励むことを騎士団長に約束しました。その後すぐに主人はヴィルバルトに美しい馬を与え、いつも彼に仕えてともに馬を走らせるようにと、従者をつけてやりました。従者はあらゆる森や荒野、森林にある崖や道、小径をみなよく知っていたので、ヴィルバルトはいっそう彼を重宝しました。

さて、ヴィルバルトは主人のもとを辞して、この喜びをわかちあおうと、急いでフリートベルトのもとへ行きました。ヴィルバルトは言いました。「ああ、我が親愛なる兄弟、僕と一緒に喜んでください！この幸運の女神は、僕のことをとても気に入ってくれているようです。我が慈悲深きご主人さまが、僕を家人に、そして森林長官に迎え入れてくださり、いつでも僕に仕えてくれるりっぱな従者までつけてくださいました。」ヴィルバルトはその際、自分の任務と命令されたことのすべてをフリートベルトに話しました。とりわけ、ヴィルバルトがお咎めなしでその職に就き、とても熱心に獣と対峙していたのを見ると、フリートベルトは大いに喜び、同じく老騎士ゴットリーブもたいそう嬉しく思いました。ヴィルバルトは恐ろしい熊や猪、そしてその他のぞっとするような野獣たちを相手に、いくつもの過酷な冒険を乗り越えなければなりませんでしたが、ヴィルバルトを前にして身を隠しておける獣などおらず、彼に見つけられ、狩りだされるのでした。ヴィルバルトは長らくそうした任務に就いて、弓と矢で討ちとった多くの獣を宮廷へと運んでいました。彼の従者も特別に訓練されていました。というのも、彼ら二人が一緒にいると、強大な熊や猪でさえ我が物顔ではいられなかったからです。二人はすばやく巧みに獣をしとめました。

しかしかつてのことですが、岩山の洞穴に子熊を連れた恐ろしい母熊がいました。今ではこの子熊たちは、かなり大きく、強くなっていました。ヴィルバルトと従者は、偶然その洞穴へとやってきて、二頭の若い熊がその前を歩いて、大きな石で遊んだり、日なたを転げまわったりしているのを見ました。またあるときはモミの木若木の上へよじ登ったりもしていました。このようにして若熊たちは強さと敏捷さを鍛え、それを使うことを習っていたのでした。ヴィルバルトと従者は大きな驚き

をもって二頭の若熊を見ました。しかし母熊はえさを取りに出かけていました。ヴィルバルトと従者は若熊たちをしばらく観察し、二頭に射かける決心をしました。そして二人はぐずぐずせずに弓を引くと、若熊めがけて矢を放ちました。ヴィルバルトは一頭に命中させましたが、従者がもう一頭を射止めたとき、その熊は大きなうめき声とともに谷に落ちていきました。

老いた母熊はただちにこれを聞きつけ、猛烈な勢いで山を駆け上がり、自分の洞穴へと突進してきました。母熊は、二人の狩人がしとめた熊の上に立っているのを見つけると、猛烈な勢いで二人に襲いかかりました。狩人たちは鋭い猪狩り用の槍を手に取り、身を守るほかありませんでした。しかし従者は母熊をしとめようと、主人の前に飛び出したとき、母熊はすばやく槍を奪いとって粉々に砕くと、槍の柄をはるか谷底へと投げ捨ててしまいました。従者はぐずぐずせずに、自分の弓を取ると母熊の頭めがけて勢いよく矢を放ったので、よろめきました。ヴィルバルトはそれを見てとると、自分のりっぱな槍をさっと引き抜いて、すぐさま母熊を一突きしてしとめました。

ヴィルバルトと従者は大きな不安でもって母熊に打ち勝つと、小枝と木の葉で若熊と母熊を覆って引きずっていき、馬にまたがり森をあとにしました。となり村で農夫を雇い、若熊と母熊を森から運び出すように頼むと、二人はボースナの宮廷へ運びました。それを見た人たちは皆、少なからず驚きました。というのも、二人は特別な猟犬も縄も罟も使わずに獣を捕らえ、しとめたからです。

ゴットリーブもこのことを耳にすると、そのとてつもなく大きな獣を見に宮廷へとやってきました。彼はヴィルバルトの従者から、森であったことの次第のすべてを聞くと、ひそかに考えたのでした。「ああ神よ、あなたのご判断はなんとすばらしいことか！あなたはこれほど幾多の大きな危険に際しても愚息を守ってくださるので、きっと彼は今後も大きな危険を乗り越えていくに違いありません。ヴィルバルトはたぐいまれな星のもとに生まれてきたのだと思います。そこでお願いします！以前のようなふしだらな生活を始めてしまわないよう、いついかなる時も不名誉と悪徳から守り、そのほかにも愚息に仕事をお与えください。」

この話はここまでにしておきましょう。森や荒野や山々でヴィルバル

トと従者に起こったことすべてを述べると、それだけで一冊の本になるでしょう。そういうわけで、ヴィルバルトの身にさらに起こったこと、彼が結婚したこと、そして彼の父である老騎士の身に起きたことについても書き進めましょう。同じく宰相であるフリートベルトと秘書官のフェーリクスについても、書き進めることにいたしましょう。

第二十五章

ヴィルバルトが父親のあとを継いだこと。騎士団長が彼に裕福な女性を
めとらせたこと。



ヴィルバルトが従者を連れ、大いに職務に励んで今や三年目、あらゆる獣の卓越した狩人となっていました。彼は騎士団長の覚えことのほかめでたく、日に日に俸給が上がった結果、短い期間で手持ちのお金が再び貯まりました。しかしそのお金はラウジッツのグロッカウやブラバントのアントワープで、ロタールと多額の財産を使い果たしたときに比べ、より多くの努力を払ってなくならないようにしていました。

さてヴィルバルトの勤勉と博識を見て取った騎士団長は、彼にも手助けして結婚させてやろうと考えました。ある日、宰相フリートベルトと秘書官フェーリクスが騎士団長のもとで仕事を終えて帰宅しようとしたとき、騎士団長が言いました。「フリートベルト、フェーリクス、二人とも知っての通り、おまえたちは若いとき騎士ゴットリーブに引き取られた。それからゴットリーブは息子ヴィルバルトに対する愛情から、彼の人格形成と教育のためにおまえたちと関わりあった。しかしヴィルバルトは邪悪でろくでもない連中にそそのかされ、学業と父親から逃げ、多額の財産を無駄に使果たし、その結果、長いあいだ悲惨と貧困の中でみじめな生活をしてきた。

さてお前たちも知っての通り、ヴィルバルトの親不孝な人生は、お前たちにとっては大いに良い方へ働き、ヴィルバルトが去ったあと、二人とも老騎士ゴットリーブによって多くの努力と費用をかけて養われた。さらに騎士が熱心に頼むので、私はお前たち二人を大学へやり、その後名高い二人の令嬢を盛大な結婚式でしっかりめとらせてやった。こうしてお前たちも私の宮廷で重要な立場となり、あれやこれや気かけ、善良なヴィルバルトには適切な助言を与えて助けてやっている。見ての通り、彼の父親、誠実な老騎士は体力が衰えており、時とともに弱くなっている。片やヴィルバルトは若く強く疲れを知らない青年だ。高齢の父親をいたわるため、私はヴィルバルトをその後継に指名したいと思っているのだが。ヴィルバルトは父親からも教えを受けてきたので、彼が宮廷長官にとどまる限り、その教えが生涯にわたって役に立つであろう。

それゆえ、おまえたち二人には彼に相応しい美しい乙女を探してほしいと考えている。ヴィルバルトは若いときはえらく荒れていたが、それはそれ、彼は身に起こった貧困やみじめな境遇をよく考え、新しい立場に順応してくれるだろう。私は三年目のヴィルバルトの仕事ぶりを吟味してきたが、彼には嫌なところも疑わしいところも感じられない。この件についてよく考えてくれ。」こう言って騎士団長は話を終えました。

フリートベルトとフェーリクスはお辞儀をしたあと、ヴィルバルトの件で主人に感謝し、ヴィルバルトに相応しく、尽くしてくれる乙女が未亡人が見つかるまで、この件を追求し続けたいと述べました。こうしてフリートベルトとフェーリクスは主人のもとを辞し、ヴィルバルトにい

よいよ運が向いてきたことを心の底から喜びました。二人は乙女を紹介してもらえそうな町々で一生懸命聞いて回りました。しかしヴィルバルトに尽くしてくれるような女性はいませんでした。ただこのもくろみはヴィルバルトにも、彼の父親にもまったく伏せられていました。それは騎士団長が望んだことだったからです。

さて、ボースナの町には一人の貧しい貴族がおり、彼には美しい娘がたくさんいました。しかし彼の両親があまり財産を残してくれず、また年金や地代もわずかで、給金はほとんどありませんでした。そのため身分に相応しいよう娘たちの嫁入りを整えてやることができず、娘たちをしばしば女子修道院にあずけなければなりませんでした。しかし娘のうち一人はとりわけ美しかったので、裕福な商人に結婚を求められました。父親は喜んで商人に娘を与えました。商人は娘をたいへん気に入り、それは娘も同じでした。

しかし商人は新婚の年に病にかかり、命取りとなる熱を出しました。この熱はひどく商人を苛み、彼はとうとう床に臥すと、身重の妻を残して死んでしまいました。妻は夫の死のせいでたいそう憔悴しました。ほどなくして彼女は大きな悲しみを抱いて出産したため、産まれた子もまたたくまに死んでしまいました。彼女は新たな苦しみと痛みに襲われ、とても衰弱したので、誰もその命を約束することができませんでした。しかし彼女は、神さまの助けや医者助言、薬によって回復すると、未亡人のままでいようと心に決めたのでした。

こうして彼女は、商人の遺した多くの財産を邪魔立てなく手に入れました。そして他の若い男たちが求婚しに来ると、彼女はそれをいつも断りました。そして、どんな男たちにも強く抗い、未亡人のままでいたい、といつも言いました。しかし苦しみが少し和らぐと、陰口さえなければ思い切って求婚を受けたいと考えるようになりました。

フリートベルトが最初に思いついたのはこの未亡人でした。彼はすぐに義兄弟のフェーリクスのもとへ行き、自らの考えを示しました。フェーリクスもこれをととても気に入りました。「ああ、神さま」フェーリクスが言いました。「この話が進展するように、ただ馬車を上手く軌道に乗せられればなあ。彼女を説き伏せられないのではないかと心配だ。なぜなら彼女は夫の死後、断固として死ぬまで未亡人のままいるこ

とを心に決めたのだから。」フリートベルトが答えました。「だがそれはまったく問題ではない。女性が長い髪や衣服を好むのが確かなように、短慮であることも確かだ。ああ神さま、我がご主人さまが再び夫を与えてやろうと言って、どなたかに求婚させたら、彼女はどんなに喜ぶだろう。そうすれば彼女は言い寄ってきていた男たちに、我が慈悲深きご主人さまの誠実なお願いを断ることができなかつたと弁解することもできる。それに先んじて、我が慈悲深きご主人さまがヴィルバルトに宮廷長官の座を譲るのが最良だろう。この善良な女性が、私はかつて商人の妻だったけれど、いまや宮廷長官の奥方と呼ばれるわ、と考えてくれれば、馬をはやく走らせることができるだろう。女性は皆、夫の職階を夫自身よりもはるかに自慢に思うということを、君も知っているはずだから。こういったことは初めの母から受け継がれている。悪魔が樂園でエヴァに、お前たちが禁断の食べ物を食べれば、神のように知恵を得て善悪を知ると言ったとき、もはやためらいもなく林檎は枝からもぎ取られた。知恵をつけたい一心で、彼女はそこへ駆けていったのだ。君も多くの女性を見てきたろう。彼女たちは貧しいだけでなく、ほとんど軽蔑すらされていたのに、幸運にも大きな名誉と財産を手にし、夫が死去すると彼女たちはもはや最初の貧しさを思い出せず、普通の市民はあえて彼女たちに言い寄りはない。というのも、かつて市参事会員の妻であった人たちは、いまや市長を夫に望むからだ。これには君も同意するだろう。」

フェーリクスが言いました。「君の言う通りだ。この件を始めるために宮廷に向かおう。仕事から解放され手持無沙汰な我が慈悲深きご主人さまがいらっしゃるだろう。」そこで二人は宮廷へ行き、主人にこの話を申し立てました。

第二十六章

ヴィルバルトが従者のためにとりなして、彼を自分の後任の森林長官に就けたこと。

フリートベルトは義兄弟のフェーリクスとともに宮廷へとやってきました。騎士団長は二人の様子から、彼らがヴィルバルトのために来たの

だと、すぐにわかりました。ただちに騎士団長は二人に何の用かと尋ねました。その内容が騎士団長に、上記のごとく長々と知らされると、まずヴィルバルトに宮廷長官の職が与えられました。それにともない二人は、ヴィルバルトが妻をめとることを期待しました。このことは、ヴィルバルトが榮譽を得られるようにと、二人の望んだことでした。騎士団長は「このことについて、しかるべきかたちで対処しよう」と言いました。すぐに老騎士のもとに遣いの者が送られてきました。同じくヴィルバルトのところにも送られてきました。



さて二人がやってきたとき、はじめに騎士団長は、どれほどの忠実な奉公がゴットリーブによってもたらされてきたのかを語りました。そしてゴットリーブがこれ以上は十分に奉仕できない年齢であると嘆きました。もしゴットリーブが年をとることで衰えてしまったなら、それはプロイセン宮廷全体の損失となろう。しかし全能なる神が事態を再びこのようになさり、多くの不安と貧困、苦心と労苦とを経験した放蕩息子のヴィルバルトが見つかって、故国に戻ってきたのであれば、ヴィルバル

トはすでに子供靴を履きつぶし、今や父親のすぐ後ろを歩いていることを期待している。しかしゴットリーブは万事において以前と同じく尊重されるべきであり、彼の俸給はこれからも維持されるべきである。またヴィルバルトは父親の忠告と知恵なしには、何ごとも行うべきではなく、彼が宮廷の慣習を日ごと教わるために、いかなるときもその忠告を守るべきであり、それこそが私の最大の望みである、と言いました。

そのようなことを善良で誠実な老騎士は聞いたので、彼の心は喜びであふれんばかりに満ち満ちて、主人に対して恭しく、精一杯心から感謝したのでした。その後、老騎士は自分の後任として騎士団長に息子をゆだね、どんな宮廷の業務も滞らないように、ヴィルバルトの職務すべてに助言をして安心させました。こうして、かつて貧困と労苦、空腹と渇きのすべてを経験したヴィルバルトが、プロイセン宮廷の最高位である宮廷長官になったのでした。フリートベルトとフェーリクスは、ヴィルバルトの就いた新しい名誉ある職に幸多からんことを願いました。ヴィルバルトは誠実にも従者のことを思いやって、騎士団長に、宮廷長官としてのはじめての願いを認め、従者を自分の後任の森林長官にもらえるよう懇願しました。このことはヴィルバルトの願い通りになされたのでした。

さて、これらすべてが行われたとき、騎士団長はさらに話しはじめました。「ヴィルバルトよ！」騎士団長は言いました。「わしがお前の幸せを心から思っていることを知ってほしい。慎み深く、美しく、そして裕福な貴族の生まれの未亡人がいる。このことがお前にとって好ましいのであれば、その未亡人についてお前に話させようと思う。だが、彼女が誰なのかを知ってもらうために、名前を聞かせよう。彼女はマリーナという名で、ある裕福な商人を夫としていたが、その男は一年にも満たないあいだしか、彼女のもとで暮らさなかった。彼女は独身で、とてつもない財産を持っている。」ゴットリーブとヴィルバルトがこの未亡人のことを聞くやいなや、彼女が誰だかよくわかりました。ただちにこのことは、すべて騎士団長の思うままにゆだねることにしました。騎士団長は、最も信頼する宰相としてフリートベルトと彼の秘書官フェーリクスに求婚状を持たせて、女のもとへと遣わしました。その求婚状は、ヴィルバルトの幸せが芽吹き、成長するようにと、二人があらかじめ彼のた

イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）（10）

めに喜んで書いたものでした。

